

スウィフトの生涯 (Ⅷ)

「カディナスとヴァネッサ」執筆から
 シェリダンおよびデラニーとの出会いまで
 (1713 / 14 - 19)

三 浦 謙

前章で触れたスウィフトとヴァネッサとの関係は 889 行からなる長詩「カディナスとヴァネッサ」⁽¹⁾の中でスウィフト自身が語っている。カディナスというのはラテン語の Decanus のもじりで、首任司祭 Dean のことである。スウィフトがダブリンの聖パトリック大聖堂の首任司祭になったのは 1713 年 6 月のことだから、この詩を書きだしたのはそれ以降のことだろう。

この詩の中で、ヴァネッサは英知と思慮分別の典型となるべくこの世に誕生する。ヴァネッサ誕生のさい、ヴィーナスが美神を召喚してヴァネッサに汚れることのない清潔な皮膚と清純な魂をあたえるように指示すると、パラスは生まれる嬰兒が男子であると思いこんでヴァネッサの心中に、

女性には長い間未知で
 男性にこそ相応しい種子。
 知識と判断と分別の種子

(203 - 5)

を蒔いてしまう。

こうして、ヴァネッサは男性の気質をそなえた淑女となるように運命づけられてこの世に生まれてくる。

早くからカディナスの指導の下にヴァネッサが親しむ書物はキューピッ

ドの矢を防ぐ楯として働くが、いつしか彼女の胸に恋の一矢が突きささってしまふ。

20歳に満たないヴァネッサは
 44歳の僧衣を夢見、
 読書でほとんど盲目となった眼に
 魅惑をおぼえる。
 カディカスが、いまでは健康がおとろえ
 中老の身であるとも思えない。
 彼女はカディナスの言葉に音楽を感じ、
 容貌をいとわず彼を若々しいと思う (524-31)

ヴァネッサはにわかに一変してカディナスの教に耳を傾けなくなりカディナスを驚かす。カディナスの教はもっぱら知育の向上で豊かな心情を培う教ではなかったとなじる。役廻りが転倒して、

ヴァネッサが教師になり、
 カディナスが生徒になる (806-7)

カディナスは屈辱と失望と罪悪感に苛まれる。これまで、どんな女性もこれほど彼の気持を左右したことはなかった。カディナスはじぶんの教がこのような結果を生むとは全く予想もしなかった。

だが、この2人がどのような結末を迎えるか、この詩は語っていない。2人の間は次の10行の詩句に謎のように包まれていて、スウィフト自身けっして明かそうとはしない。

だが、ヴァネッサがどこまで想いを遂げたか
 世間にはいぜん謎である。
 ニンフが愛する恋人をよるこぼすために、
 高いロマンティックな調子で話そうと、
 あるいは当の恋人がついに地上に降りきたって、

天人らしからぬお目当てで行動しようと、
もしくは職務を混同させようと、
ニンフとその恋人の2人が恋愛と学殖を和合させようと、
けっして人間に語ってはならない、
ミューズも意識して明かそうとはしないだろう。 (818-27)

スウィフトはなぜヴァネッサとの間を謎にしておきたかったのか。その理由の1つは2人の仲がスキャンダルとして喧伝されることをスウィフトが恐れたことである。ララカー発信の1713年7月8日付のヴァネッサへの手紙では、出版業者のトック^②や印刷業者のバーバー^③には使っているDearをヴァネッサには使わなくなっているし、翌年8月12日の、アイルランドへの移住を決意したヴァネッサへの手紙では次のように警告している。

私がアイルランドにいるとき、あなたがきても私はめったにあなたに会いません。ここは屈託のおけないところではありません。1週間もすればなにもかもわかるし、100倍に誇張されて拡がる場所です^④。

ところが、ヴァネッサはその年の内にアイルランドにやってきてダブリンの西約11マイルのセルブリッジ^⑤に到着く。ここからヴァネッサの悲劇が始まった。

2つめの理由はステラへの配慮である。ステラは1722年迄は健康で、かなり好きな乗馬も楽しんでいたが、それ以降は軀が衰弱し1723年2月頃には食欲の減退が目立つようになった。同年2月12日付のトーマス・ウォーリス師宛の手紙では「ステラは1週間に1オンス(1/16ポンド)ぐらいしか食べません。一緒に食事していて私は驚きました」^⑥とっている。ヴァネッサの存在はステラの身心を損ねる大きな要因の1つになった。スウィフトが「カディナスとヴァネッサ」で2人の間を謎で包んだのはこうしたステラへの配慮があったために違いない。

アイルランドに移り住んだヴァネッサはスウィフトの冷たさに腹を立て、1720年頃からはスウィフトとの関係を後悔して10週間スウィフトに会わないこともあった。ヴァネッサはセルブリッジの近くのマーレイ修道院⁽⁷⁾にこもり、思い余ってステラにスウィフトの妻であるかどうか確かめる手紙を出す。ステラはその手紙をスウィフトに送る。受取ったスウィフトは激怒して馬をマーレイ修道院に走らせ、着くと案内もなしに中に入り、ものもいわずにヴァネッサの手紙の入った封筒を彼女の面前でテーブルに叩きつけた。この一件があってから数週間後の1723年6月2日ヴァネッサは死んだ。彼女の遺骸は聖アンドリュース寺院の墓地に葬られた。

スウィフトにとってヴァネッサとの交情はなんであったのか。8年間ヴァネッサをもてあそび最後には絶望させたことにはならないのか。スウィフトがある時期までヴァネッサに真情をもって対していたことは事実である。スウィフトは1721年7月5日のヴァネッサへの手紙で、

カディナスは……あなたをなににもまして愛し尊重している。この気持は終生変わることはありません。だが、同時に想像を逞しくしてあなたとカディナスを不幸にしないようにしてほしい⁽⁸⁾。

といている。想像を逞しくするなどはヴァネッサにとって障害になっていたスウィフトとステラとの関係に立ち入るなということだった。ところが、ヴァネッサはこらえきれずに、この「聖域」に足を踏み入れた。これが2人の破局につながった。

ヴァネッサは死ぬ1ヶ月前に遺書を作った。約6,000ポンドの不動産の管理人としてヴァネッサは哲学者で後、クロイン⁽⁹⁾の主教となったG. バークレイ⁽¹⁰⁾とアイルランドの民事訴訟の判事の1人マーシャル⁽¹¹⁾の2人を指名した。遺書の中でスウィフトへの言及は一切なかった。指輪を買うようにと25ポンドずつ割りふった友人のリストの中にもスウィフトの名前は入っていなかった。

ヴァネッサの死後、スウィフトは悔恨と自責の念に駆られて4ヶ月アイルランド南部を彷徨した。だれにも行先を告げず、時折友人に出した私信

でヴァネッサに触れることはなかった。

ところで1714年8月アイルランドに戻ってからの最初の2年間は公私両面でスウィフトには多難な年だった。スウィフトはアイルランドにきて間もなくボーリンブルックが職を逐われたと聞いた時、前トーリー内閣の要人にとって最悪の事態を予測した。プライアー⁽¹²⁾は書類を押収されてすでに弾劾されていた。チェトウオード⁽¹³⁾は講和委員会から除名された。逮捕の危険を察知したボーリンブルックは1715年3月2日フランスへ逃亡した。

スウィフトは逃げなかったが主任司祭の職を逐われるのを覚悟してハーリーに1715年3月1日付の手紙で次のようなことをいっている。

政権の座にあるホイッグの連中が国教会を打ち壊し、主教制や主任司祭制を無益で邪悪な制度として廃止が適当と考えるさいには、いつでもあなたから年50ポンドいただければ私はガーンジー島⁽¹⁴⁾（英国海峡第2の島）で暮します。あの島ならワインも食糧も安いので私はそう決めました⁽¹⁵⁾。

ボーリンブルックが逃亡した翌月、オーモンドもフランスへ逃亡した。新聞紙上では、スウィフトがお尋ね者として名指されてスウィフトの首に500ポンドの懸賞金がかかったというまことしやかな風評がとりさたされた。キング大主教は控訴院判事の地位を利用してスウィフトを陥し入れようと図り、有力閣僚であるスタンホープ⁽¹⁶⁾に入手した証拠書類を送った。幸いにもキング大主教が送った書類は謀叛の証にはならなかった。

スウィフトはキングの謀略に屈しなかった。1715年6月21日付のチェトウオード宛の手紙でスウィフトは

呼びだされても私は一言もしゃべらないし名前をだれ一人明かすつもりはありませんでした。大主教はそれでは私の罪になるといいました。私はそれでも構わない。私のために他人に苦い思いをさせるくらいなら、私が苦しむほうがましだと答えました⁽¹⁷⁾。

とっている。スウィフトは友誼に厚く気骨があった。ホイッグ内閣がジャコバイトおよびそのシンパを根こそぎ検挙する挙に出たので密告者も自然増えていった。ロンドンで不屈者のスウィフトが身を隠したという噂が流れていると聞くと、スウィフトは故意にダブリン城に姿を見せたりした。1715年7月16日、ついに司直の手がまわってハーリーは捕えられロンドン塔に幽閉された。告訴が取り下げられるまで以後2年間ハーリーはロンドン塔に囚われの身となる。スウィフトはハーリー逮捕の報を聞くと早速ハーリーに手紙を送った。

私はあなたが今日最も有能で信頼するに足る閣僚であったと考えます。敵の悪意と憤怒がいかようであろうとも、私はあなたをそのような人物として後代に伝えます⁽¹⁸⁾。

フランスに逃げたボーリンブルックは僭王ジェームズの有力閣僚となり1715年ジャコバイト蜂起の計画を練る。だが、ボーリンブルックとジェームズとの結びつきはしっくりいかず、とくにルイ14世の死後は計画を実行するための資金が滞りがちだった。同年10月と12月にオーモンドはデーヴォンに上陸を企てるが2度とも失敗。11月にはスコットのジャコバイトがシェリフミューア⁽¹⁹⁾で敗北する。12月末ジェームズ自身がピーターヘッド⁽²⁰⁾に上陸した時は戦意を失った兵4000が周辺にいるだけだった。敗北を自覚したジェームズは翌年3月ボーリンブルックを罷免する。するとボーリンブルックはホイッグの誘いに乗って密告者に変身し、かつての同志を裏切る。1716年10月ボーリンブルックはスウィフトに手紙⁽²¹⁾を出し、トーリー・ジャコバイトは出口のない暗い穴に入りこんだようなもので、もはや明るみに出ることはできないと告げる。するとボーリンブルックの寝返りを知ったキング大主教はスウィフトに「ボーリンブルックがあなたについての悪くない情報をもってくることを期待する」といういやがらせでしめくくった長文の手紙⁽²²⁾を出す。これにたいしスウィフトはキングへの書簡で次のように反駁する。

ボーリンブルックが密告者になり下ったのは残念に思います…密告者は時には必要かもしれませんが、かれらは唾棄すべき人種であると私は考えるからです⁽²³⁾。

スウィフトは結局証拠不十分で逮捕されることはなかったが、アン女王死後2年間のスウィフトへの書簡をみると、発信人はゲイ、アーバスノット、ヴァネッサ、ゲリー師、ウォールズ師を例外としてあとのすべてはジャコバイトもしくはジャコバイトのシンパであった。ジャコバイトの一味ではないかという強い嫌疑がスウィフトにかかったのも不思議ではない。

スウィフトはトーリーの要人であるハーリーにしろ、オーモンドにしろ、ボーリンブルックにしろジャコバイトとつながりがあるとは全く知らずに信義をつくした。それだけに、スウィフトは政治的に利用され、結局は裏切られたのである。

この間主任司祭としてのスウィフトの生活も公私両面にわたって容易ではなかった。ダブリンの牧師館ではスウィフトがホイッグだといって嫌っていたウルサクて臭い猫を前任者のスターンに仕末させるのに2、3週間もかかったし、スターンが使っていた年輩の家政婦が非協力なので首にしようとしたができなかった。飼っている馬は皆病気にかかり食べさせる乾草も思うように手に入らない。出入りの大工は6日で終わるといった仕事を2週間かかってもやり終えなかった。スウィフトは憂うつで体調を崩し、風邪をひくといつまでも直らなかった。スウィフトは「病氣」⁽²⁴⁾ という詩で次のようにコボしている。

私の健康をだれも心配してくれない。

私の生活はこの人間の関心事ではない。

だから、今、私の話し相手になっている人間も

涙を出さずに私の柩の世話をしよう。

(5-8)

住み慣れたララカーの寓居もひどかった。壁は崩れ屋根の藁はくさって

廃屋同然になっていた。パーシヴァル⁽²⁵⁾という意地の悪い隣家の男はスウィフトの土地を6フィート乗っ取り植えてあった木を勝手に運び去ったり藪を台無しにしたりした。スウィフトは1714年9月のフォードへの手紙で「この国では考えることも書くこともできない。なにもしないで時間を過しています。やりかけた仕事も1つも進んでいません。ロンドンカレットコムでしたら、もう終えていただろうと思います」⁽²⁶⁾ といっている。同年9月14日付のボーリンブルックへの手紙では「私は都会で田舎の生活を送っています。だれにも会いません。毎日1度祈祷にでかけます。数ヶ月したら馬鹿になると思います。この調子ではそうならざるをえません…20リーグ⁽²⁷⁾の海によってあなたと私との仲を割かれた上怠慢と無視に苦しみ友情の乏しさを託^{かこ}ちながら私は暮さざるをえません」⁽²⁸⁾ といっ^てて歎いている。

聖パトリック大聖堂の主任司祭としての職務を履行するさいにもスウィフトには抵抗が多かった。だが、職務上の威信と特権を守るため時には領域侵犯を図るキング大主教との衝突も辞さなかった。セント・ジェームズ王宮⁽²⁹⁾での権力闘争で鍛え上げられた男が聖パトリック大聖堂でのいさかいで出し抜かれるようなことはなかった。

スウィフトもキングも威信と先例の点では頑固で、両人とも妥協よりは対立を好む傾向があった。キングは大主教として聖パトリック大聖堂の聖堂参事会員の任命権をもっていた。キングはこの任命権を利用して聖パトリック大聖堂内でのスウィフトの権限を弱めようとした。キングはたまたま空席となった聖パトリック大聖堂の評議員に同大聖堂の参事会員であるセオフィラス・ボルトン⁽³⁰⁾を任命するように勧告した。キングはこの件でアイルランド総督サンダーランド⁽³¹⁾にも積極的に働きかけボルトンの任命が正式に決まった。スウィフトは当惑した。ボルトンは1722年クロンフェルト⁽³²⁾の主教になるまで聖パトリック大聖堂の評議員の地位に留まった。チェトワードはスウィフトに「大聖堂所属の聖堂参事会では、あなたは苦勞する⁽³³⁾」といっていたが、その言葉通りとなった。

スウィフトが聖パトリック大聖堂の主任司祭になったので彼が占めてい

た同聖堂管轄下のダンラヴィン⁽³⁴⁾の参事会員の椅子が自動的に空席となった。スウィフトはキングにトーマス・パーネル⁽³⁵⁾を推挙したが、キングはパーネルの後見人であるにもかかわらず、スウィフトの推輓を嫌って、代りにジョセフ・エスピ⁽³⁶⁾を後任に据えた。

スウィフトが首任司祭になって1ヶ月後、聖パトリック大聖堂のさる参事会員が死亡したので、スウィフトはこんどはララカーの助祭トーマス・ウォーバートン⁽³⁷⁾を後任にするようキングに懇請するが、これもハネられ、このさいは同聖堂付設の学院の教師ドルーリー師⁽³⁸⁾に落着いた。

1714年の初め聖パトリック大聖堂管轄下のラスマイクル⁽³⁹⁾の参事会員の椅子が空いてキングはフィリップ・チェムバレン⁽⁴⁰⁾を推薦した。スウィフトは資質の劣るホイッグとしてチェムバレンを嫌ったが、このときもキングの画策通りチェムバレンがラスマイクルの参事会員の職に収まった。1714年の初めはトーマス・リンゼイ⁽⁴¹⁾がアーマー⁽⁴²⁾の大主教兼全アイルランドの首座大主教になった時でもある。リンゼイの昇格に当ってスウィフトも尽力した。リンゼイはそのお返しにスウィフトに協力して聖パトリック大聖堂内のトーリー色の強化を図ったが、それでもキングの動きを阻止することはできなかった。聖堂参事会との闘争は陰うつな持久戦となった。1717年7月18日のロチェスターの主教アターベリー⁽⁴³⁾への手紙でスウィフトは「アイルランドに初めてきた時以来、教会関係の友人からもっと慎重に振舞うようにという助言をいただいてきました。私の地位にかかわるすべての事柄で私に反対することが、私のところの聖堂参事会ではお手柄になっています」⁽⁴⁴⁾ といっただけで嘆いている。

だが、着実な努力が報われて、スウィフトに主任司祭としての威信が徐々についてくる。1721年所管の参事会との軋轢で苦しむオッソリー⁽⁴⁵⁾の主任司祭ロバート・モッソム⁽⁴⁶⁾がスウィフトに助言をもとめてきた時、スウィフトは「主任司祭の同意なしでは、なに1つできないというのが私のところの鉄則になっています」⁽⁴⁷⁾ といい切れるまでになった。

この時期スウィフトに新しい友情が芽生えてくる。1人はシェリダン⁽⁴⁸⁾もう1人はデラニー⁽⁴⁹⁾である。

スウィフトがトーマス・シェリダンを知るようになったのは1717年の中頃である。彼はキャバン⁽⁵⁰⁾の出身でスウィフトより20歳年下だった。晩学で20歳でトリニティ・カレッジ・ダブリンに入るが学業成績優秀で3年の時奨学金をもらい1711年トリニティを卒業している。卒業後は聖職者になる資格はとったものの学校教師になる道を選んで、ダブリンのキャペル・ストリート⁽⁵¹⁾に男子を対象にした学校を開く。シェリダンは芝居好きで毎年生徒と古典劇の上演を楽しんだ。スウィフトが誘われてシェリダンの学校の生徒が演ずるギリシャ劇を観に行き5シリング5ペンス払ったという記録が残っている。

シェリダンはトリニティ在学中に結婚するが結婚後1週間で早手廻しの結婚を悔んでいる。相手はマックファドン⁽⁵²⁾というキャバンのさる地主の跡とり娘である。シェリダンもスウィフトもコキオロシている悪妻で、シェリダンは遺書の中で、彼女のことを思いやりのない女だといい、彼女には遺産として僅か5シリングの金を与えたのみだった。シェリダンは彼女のことを鉄の鎖で縛りつけられた、碾臼のように重い木靴だといい、スウィフトはシェリダンの妻を怠け者で贅沢でひねくれていて、猜疑心の強い女だといっている。ところが、子供好きのシェリダンは彼女に次々と子供を産ませた。スウィフトはその中で最も出来のいい3番目の息子の名付け親になっている。彼は劇作家リチャード・ブリンズレー・シェリダン⁽⁵³⁾の父親でスウィフトの伝記を書いている。

シェリダンはヴァイオリンが巧みで、数学と音楽が好きだった。スウィフトはシェリダンの学識には一目置いていた。スウィフトが愛したのはシェリダンのユーモアと溢れるばかりの情熱的な気質だった。2人は戯詩を作っては讃めたり眨し合ったりした。彼らは学童のように取組み合いの喧嘩をしたかと思うとすぐ仲直りした。時には悪ふざけが嵩じて相手に傷手を負わせることもあった。どちらかというとならぬシェリダンのほうが辛辣だった。ある時、シェリダンがスウィフトの詩神の葬儀をテーマにした長詩を書いた。この葬儀にはロバとフクロウが出席する。ロバは愚かな頑固者、フクロウは賢い愚か者のシムボルである。シェリダンはこの詩

が気に入って友人に見せて回った。スウィフトは不快だった。1718年11月10日のデラニーへの手紙で、スウィフトは「葬儀」の詩は友人間のからかいの枠を超えている。「同じようなことを考えるのなら、私に疑問を抱かせずに善意のこもった形でいうべきです。そうでないと、私は冗談がわからない人間と思われまます」⁽⁵⁴⁾ といっている。スウィフトには相当こたえたらしい。

パトリック・デラニーはシェリダンの紹介で1718年スウィフトと知り合った時は34歳で、トリニティ・カレッジ・ダブリンの特別研究員であった。彼はスウィフトとシェリダンの仲間に加わって戯詩を作って興じたが、用心深い周到な性格でスウィフトとは常にある距離を保った。戯詩には長じていた。「デラニー氏」という詩⁽⁵⁵⁾の中で、スウィフトは次のようにいっている。

冗句のなんたるかを教えてくれる

まことにありがたい諧謔を勉強するには、

散文なら、ヴァチュール⁽⁵⁶⁾、

韻文ならあなたのお作をお薦めする

(103-106)

スウィフトも戯詩を好んで作ったが、スウィフトにとって社交上の最大の楽しみは会話だった。トランプ遊びもしないではなかったが、トランプは陽気な会話を滞らせるといって余り好まなかった。スウィフトが好んだ会話の型は『ガリバー旅行記』の中でガリバーが惚れこんだフイヌムの話しぶりだった。こわばらないで品位のある話し方——途切れることがなく相手に退屈を感じさせることのない会話である。そして、時折の短い沈黙によって蘇る会話である。デラニーはスウィフトはきわめて簡潔に喋り適宜相手の出方を待っていたといっている。スウィフトにとって会話はマナーの尺度であり、チャールズ1世の治世(1625-49)に会話の用語が最も改善され、この上なく洗練されたとスウィフトは考えていた⁽⁵⁷⁾。

この時期スウィフトはクローガー⁽⁵⁸⁾でステラと式を挙げたのではないかという臆測がある。1716年8月30日から10月4日迄の間のことである。

この間、友人との文通は全く途絶えているし、スウィフトがパーシバルから買いもとめたララカーの土地20エーカーは挙式の記念だったといわれている。

確かなところは不明だが、アイルランドに移り住んで、ダブリンの牧師館に程近いセント・メアリーズ教会⁽⁵⁹⁾の近辺にディングレー夫人と落ち着いたステラはスウィフトにとってアイルランドでの生活の大きな支えだった。それだけにスウィフトは1719年からステラが死ぬ1727年迄、20年と26年の2回の中断を除いて、毎年3月13日のステラの誕生日には祝いの詩を贈っている。これら一連の詩でスウィフトは理性的で品位あるステラ⁽⁶⁰⁾の誕生を心から祝っている。

ステラが38歳の誕生日を迎えた1719年の詩では、

いかなる時代も、あなたの眼の輝きや
 あなたの知性の半ばまでも具えた
 賢明で品位ある美女を
 一組生みだすことはできないだろう (11-14)

と讃え、1725年の詩では、

私の視力はあなたの軀の衰えに見合っている。
 それに、私は気恥しくて眼鏡をかけることを好まないから、
 あなたの顔の皺も、それと気づかずに見過すことだろう (44-46)

と、ユーモラスな口調でお互いの肉体の老化を認めながらも、

いくつになっても、あなたから、
 名誉と美德、分別と知恵を尚ぶ気持がなくなることはない。
 だからこそ、あなたは相変らず私にとって若々しいのだ。(49-51)

といって、40半ばのステラの美点を称揚している。そして、ステラの誕生日の祝詩の中で、真情のこもった最も美しい1727年の祝詩では、

この日は運命の女神がなにを命じようとも、
 私には大きな喜びであることに変わりはない。
 だから、あなたが病気で私が年をとった
 などと他人ひとにいわれないようにしよう (1-4)

と切り出している。これは、ステラの最後の誕生日の詩である。当時、ステラの病状は思わしくなかった。この詩を贈ってから1ヶ月足らずで、スウィフトはイングランドへ渡るが、出発前にステラの病いを気遣い、留守中はレベッカ・ディングレーと牧師館で過ごすようステラをいたわっている。

だが、ステラの病気の回復が望めないと観念したスウィフトは、

理性的であれば、
 一段と楽しい想いが経験できるし、
 それが老いさらばえても、
 残り少ない日々の支えになってくれる (9-12)

といて慰め、最後に叫ばんばかりに、こう訴えている。

喜んであなたの苦しみを共に味わい、
 半端な余生をあなたに捧げようとしている
 この私に、あなたは苦しみを分かちあたえるべきだ (83-85)

ステラは1728年1月28日に死んだ。彼女の墓所は聖パトリック大聖堂の中にあって彼女の遺骨はスウィフトの遺骨と隣り合わせに埋葬されている。

話を元に戻す。1717年以降、スウィフトがシェリダンやデラニーと知合うようになってからは、牧師館の生活は改善されてきた。家政婦にはブレント夫人⁽⁶¹⁾が取って替った。彼女はプレズビテリアンの老女でスウィフトにはよく尽した。スウィフトは家政婦には他の下僕よりも遥かによい給料を払った。平均週5日スウィフトは牧師館で差向いで彼女と食事をした。

家僕としては他に家令、下男、料理女、馬丁、厩番がいた。その外、必要に応じて大聖堂から用人を連れてきた。馬は3頭飼っていた。大柄で雀斑のある料理女メアリーは料理の外、スウィフトのベッド・メイキングをしたり、靴下の繕いをしたりした。彼女はスウィフトのお気に入り、スウィフトは彼女のことをスウィート・ハートとよんでいた。下僕の質は概してイングランドよりもアイルランドの方が劣ったが、スウィフトは高給を払い臨時の仕事には別個に金を与えたので、自分からやめてゆく者はまずなかった。ふつう食事つきで1人当り週4シリング払った。

スウィフトは乗馬には目がなかった。乗馬ほど健康によいものはないと思こんでいた。ヴァネッサの妹のメアリーが重病で日に日に弱っていた時にもスウィフトは乗馬を良薬としてすすめた。だが、この処方もスウィフトの業病にはあまり利目はなかった。メニエール症候群の兆候である目まいとつんぼは、アン女王の死後はげしくなった。一度起きると数週間続く目まいとつんぼを1ヶ月経験しないで過すことはまずなかった。

こうして宿痾に苦しみながらスウィフトは前任者スターンの後を引き継いで、かなりの借財があったので節儉につとめたが、金銭の扱いには妙な癖があった。ポープは当時のスウィフトについて次のような逸話を伝えている。

ある日の夕刻、ポープはゲイと連れ立って牧師館にスウィフトを訪ねた。スウィフトが「よくこの金廻りの悪い牧師の家を訪ねてくれた。夕食ぐらいは出さなくてはいけないね」というと、ポープは「いや、2人とも夕食はすませてきた」と答えた。すると、スウィフトは驚いて、「まだ8時にもならないのに早すぎるじゃないか。きみたちに夕食を出すとしたら、なににするかな。ロブスターならいいだろう。ロブスター2人前2シリング、果実入りパイ1シリング、それにワイン1びん2シリング、全部で5シリング。だから、1人2シリング6ペンスとしよう」といって、半クラウンの銀貨を1つずつポープとゲイに無理やり受け取らせたという。

スウィフトは1719年頃から困窮している商人や職人に破格の安い利子で金を借す仕事を始めた。シェリダンによると、最初の500ポンドは5ポ

ンドないし 10 ポンドずつ貧しい実直な商人に貸しあたえた。金利なしで、毎週 2 シリングか 4 シリングずつ返済させた。ブレント夫人が記帳を一切引き受けた。スウィフトは単なる慈善は施しをする者にも施しをうける者にもプラスにはならないという考え方だった。スウィフトは自助の精神を尚んだ。

ジョンソンはスウィフトのこうしたやり方に批判的だった。金利はとらなくとも返済期日を正確に守ることは貧しい者には不可能である。期日に返済しないからといって訴訟まで起すのは酷だというのがジョンソンの主張だった。だが、ジョンソンの批判は必ずしも当たっていない。次章で述べる通り、織物業者への資金の融通は甚だ効果的でスウィフトは彼らから救いの神と仰がれたからである。

注

- (1) *Cadenus and Vanessa*.
- (2) Benjamin Tooke (c. 1642–1716).
1710 年に『桶物語』の第 5 版を出版している。
- (3) John Barber (1675–1741).
ロンドン市およびロンドン市長直属の印刷業者、「ホイッグの公共精神」の印刷を手がけた。
- (4) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 123.
- (5) Celbridge. アイリッシュの地名は Kildrought. スウィフトは Kildrohod の綴りを当てている。ここにヴァネッサの父親の持家があった。
- (6) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 450.
- (7) Marley Abbey.
- (8) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 392.
- (9) Cloyne. Cork の東南東 15 マイルの地点にある村。14 世紀に創建された大聖堂がある。
- (10) George Berkeley (1685–1753).
バークレーは 1734–53 迄、クロインの主教を勤めた。
主著 *A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge* (1710).
- (11) Robert Marshall 生没年未詳。
- (12) Matthew Prior (1664–1721).
詩人で外交官。1702 年トーリーに加わる。アン女王治世中、フランスとの交渉に当り、1713 年のユトレヒト条約締結にさいして中心的な役割を果たした。ユ

トレヒト条約は Matt's Peace といわれたほどである。アン女王の死後、ロバート・ウォルポールに弾劾され、1715年から17年迄獄に下った。獄中で長詩 *Alma, or the Progress of the Mind* (1718) を書いた。

(13) Knightley Chetwode (1650-1720).

アイルランドの地主でスウィフトと交友があった。

(14) The Isle of Guernsey. イギリスの Channel Islands にある2番目に大きな島。

(15) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 160.

(16) James Stanhope, 1st Earl (1673-1721).

ホイッグの武将兼政治家。マールボローに仕え、1708年にはスペイン駐留軍司令長官を勤めた。下院におけるホイッグの指導者で、1715年のジャコバイト蜂起を抑えた。

(17) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 173.

(18) *Ibid.*, p. 182.

(19) Sheriffmuir. スコットランド中部南 Perth 郡。the Ochil Hills の西。

(20) Peterhead. スコットランド北東部 Aberdeen 郡にある海港。

(21) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. I, II, p. 219.

(22) *Ibid.*, p. 228.

(23) *Ibid.*, pp. 237-8.

(24) *In Sickness* (1714).

スウィフトは1714年8月6日レトコムを立てアイルランドに向った。この詩はダブリン着後間もない同年10月に書かれた。

(25) John Percival (d. 1718).

(26) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. I, II, p. 127.

(27) 1 league は約3マイル。

(28) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 130.

(29) *St. James's Palace*

ヘンリー8世からヴィクトリア女王即位までの王宮。

(30) Theophilus Bolton (d. 1744).

後、Elphin の主教。Cashel の大主教を勤める。

(31) 3rd Earl of Sunderland, Charles Spencer (c. 1674-1722).

(32) Clonfert.

アイルランド共和国の西部、ゴールウェー郡の南東に位置する村。

(33) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. I, II, p. 152.

(34) Dunlavin.

(35) Thomas Parnell (1679-1718).

アングロ・アイリッシュの詩人牧師、ダブリンで生まれる。Clogher の執事

を勤め、スクリブラーラス・クラブのメンバーでもあった。

代表作 *The Hermit* (1721).

(36) Joseph Espin (c. 1674-1744).

(37) Thomas Warburton (d. 1734/5).

(38) Edward Drury (c. 1677-1737).

(39) Rathmichael.

(40) Philip Chamberlain (d. 1751).

(41) Thomas Lindsay (d. 1724).

(42) Armagh. アーマー郡。

北アイルランド南部。ローマ・カトリックおよびプロテスタントの大主教区。

(43) Francis Atterbury (1662-1732).

(44) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 279.

(45) Ossory. アイルランド共和国, キルケニー郡。ここに 1110 年滅亡した同名の古代王国があった。

(46) Robert Massom (d. 1747).

トリニティ・カレッジ・ダブリンの神学教授であったが、退任後、1703 年から 1747 年死去するまで、実に 44 年間、オッソリーの主任司祭を勤めた。

(47) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 377.

(48) Thomas Sheridan (1687-1738).

(49) Patrick Delany (c. 1685-1768).

(50) Cavan. アイルランド共和国北部の郡。Ulster の一区域。

(51) Capel Street.

(52) MacFadden.

(53) Richard Brinsley Sheridan (1751-1816).

(54) *The Correspondence of Jonathan Swift* Vol. II, p. 301.

(55) *To Mr. Delany*

(56) Vincent Voiture (1597-1648).

フランスの詩人で文筆家。

(57) *The Prose Writings of Jonathan Swift* Vol. IV, p. 9, p. 94.

(58) Clogher.

(59) St. Mary's Church.

(60) Stella (星という意味) という愛称は誕生日の祝詩の中で始めて使うようになった。

(61) Mrs. Brent (d. 1735).

主要参考文献

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Temple Scott, ed., *The Prose Works of Jonathan Swift, D. D.* (London, 1908).

Sir Walter Scott, ed., *The Works of Jonathan Swift, D. D.* (Edinburgh, 1824).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swlft* (Burt Franklin, 1969).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).

Robert C. Steensma, *Dr. John Arbntthnot* (Twayne Publishers, 1979).

David Nokes, *Jonathan Swift* (Oxford, 1987).